

「唐梅」考

鈴木 元

連歌をつらねていく上には、いくつもの約束事がある。

その約束事の一つに「賦物」がある。例えば、いま「唐何連歌」という課題がだされる。すると「唐何」の「何」に当てはめて熟語を構成する一語を探し、これを句中に詠みこまねばならないのである。遊戯性のつよかった当初は、句毎に賦物をとるよう課せられていたけれども、良基の時代には既に形骸化しつつあったようで、室町時代には、発句にのみ賦物を詠むのが一般的であった。一つ具体例を引こう。延徳四年（一四九二）正月二十五日、禁裏で行われたこの年初めの月次連歌会、この時の賦物は右に示した「唐何」。そして、発句は次の通り。¹⁾

梅はまづこゝろにかなふ色香哉（後土御門天皇）

ここは「梅」を詠むことで「唐梅」の語をなし、賦物の条件を満たしたのである（『連歌初学抄』賦物篇）。無論、発句に当座性が要求されるとはいえ、一座張行の場から窺うことのできた梅が、唐梅であったということではない。句

に詠みこまれた語と、賦物の語彙とは次元を異にする。

ところで、賦物に当てられる熟語にはその実質の不明なものが意外に多く、これまでも語学研究の側から注目されることがあった。²⁾そして中には、一見、何の問題もなさそうであるが、改めて考えると実はよくわからないというものも結構ある。この「唐梅」もその一つと行ってよいであろう。手近な辞書に依っておけば、これを「蠟梅」と説くようだが（『日本国語大辞典』等）、実は蠟梅を「カラムメ」とするのは、いずれも近世に入ってから資料のようだ。

古辞書『書言字考節用集』（享和二年へ一七七一）刊など、その代表であるが、ここは小野蘭山『本草綱目啓蒙』（享和二年へ一八〇二）序の「蠟梅」の項を引いておこう。³⁾

（前略）：コノ木ハ百九代後水尾帝ノ時、朝鮮ヨリ来ルト云伝、故ニ、俗ニカラウメ等ノ名アレドモ、今ニ至テハ皆蠟梅ト称ス（三二・灌木）

「今ニ至テハ皆蠟梅ト称」される「コノ木」が、「俗ニカ

「ラウメ」の名を得ていたこと、多くの資料の語る通りなのだが、問題となるのは「後水尾帝ノ時」云々のところであろう。これを俗伝と切り捨ててしまうことは容易だが、『古事類苑』等に引載される「地綿抄附録」にも「正保年中以後渡来草木類」(『古今要覧稿』にも)として「南京梅へ今云蠟梅」を挙げており、あなたがちこれを無視することもできない。

「蠟梅」そのものの本邦文献での初出については詳しく知らないが、文明本をはじめとした古本系の『節用集』には、既に「ラフ(ウ)バイ」の読みを伴ってこの語が掲げられており、室町時代の知識として「蠟梅」が存在していたことは確かなようである。だが、屋代弘賢編の『古今要覧稿』も具体的に挙げている通り、「蠟梅」はしばしば中国の詠物詩の対象とされており、『節用集』への登載も、樹そのものの渡来とは別に、単なる「知識」として読み取るべきものかもしれない。本邦の禅林詩に大きな影響力を有した韻引きの詩語辞書、『韻府群玉』にも「蠟梅」の語は引かれており、その注に「山谷初見、作二絶、縁此盛於京師」と記すように、中国では山谷以後の詠物とされてきたらしい。惟高妙安の『玉塵』は、これをふまえて「山谷ガハジメテ一見シテ、詩ヲ作テシヤウグワンシタニヨツテ、ミヤコニハヤツテ用イタゾ」(抄物大系)と述べている。ここ

に言う「二絶」とは、次の例を指すものであろう。いま手近な寛永十二年風月宗知刊行『山谷詩集』巻五により示す。

戲詠「蠟梅」二首

金箔鎖「春寒」、惱「人香末」展、雖「無」桃李顔、風味極「不」浅

其二

体薰「山麝臍」、色染「薔薇露」、披「弘」不「滿」襟、時「有」暗「香」度

なお詩集には、これに続け「蠟梅」にかかわる詩が二つ見えるので、これも掲げておく。

蠟梅

天公戲「剪」百花房、「奪」尽人工「更」有「香」埋「玉」地中「成」故物、「折」枝鏡裏「憶」新粧

從「張仲謀」乞「蠟梅」

聞「君」寺後野梅「發」、香蜜染成宮「樣」黃不「擬」折「來」速、「老」眼、「欲」知「春」色到「池」塘

山谷詩は東坡の詩とともに、中世禅林に広く用いられていた。当然、知識としては相当に広まっていたと考えてよい。幾種かの抄物も存するけれども、それは後でふれよう。ところで、長享二年(一四八八)十月、江戸を離れた万里集九は越後国上田山大義寺に至り、「留雪齋頌并序」を

製した。その序の中で、

夫扶桑六十余州之中、以越之後州為大雪之境、埋
山埋嶽、埋千萬仞之樹抄、其不理者、曉鯨嘶之
「声」与鵞梅笑之香而已。〔梅花無尺藏〕卷六

と記している。「鵞」は「臘」の異体字で、傍線部は即ち「臘梅」。この「臘梅」を「蠟梅」と見なしてよければ、「後水尾帝ノ時」云々の説の甚だ怪しいことの証左となる。この前年十二月十三日、等持寺にあった景徐周麟はその『日件』に「廬辺独坐、安排鵞梅詩」(『鹿苑日録』)と記している。「安排」が具体的にはどういうことを指すのか、分明ではないけれども、既に蠟梅の知識は、禅林僧の間に着実な浸透をみせつつあったものと考えてよい。

元和九年(一六二二)に編纂の成った『翰林五鳳集』卷六には、蠟梅を詠んだ詩が十首おさめられており、実はその内の八首が景徐(宜竹)の作になるもので、それらは『翰林葫蘆集』にも収められている。そこで注意しなければならぬのは、江西竜派の一首と景徐の八首は「読魯直蠟梅詩」として一括されており、やはり魯直(すなわち山谷)の詩を契機として、蠟梅が詠み出されている点である。「造蠟梅」と題された瑞岩(瑞殿竜惺力)の一首にしても、事情は同じであった。

黄九詩前識者稀、花如燃蠟暗香微、四時若不駐春色、

人力天工同一機

「黄九詩前識者稀」の一句からして、まず山谷なのである。蠟梅について詠むということと山谷の詩とは密接に結び付いていた。いや、むしろ山谷の詩に付き過ぎていた。

景徐の詩からも一首のみ例を取ろう。

山麝蕃薇入品評、蠟梅從此動京城、予章太子作花伝、
併按春風第一名

初めの傍線は先に引いた山谷詩(ロ)に拠るもの、次の傍線は、前掲『韻府群玉』の「蠟梅」注や、宋任淵の『集注』所引「王立之詩話」が記す「縁此盛於京師」を踏まえるものであろう。「予章太子」とは即ち山谷のことで、『山谷詩集注』冒頭などには「豫章黃庭堅 魯直」と見える。結局、蠟梅そのものよりは、蠟梅に詩材としての生命を吹き込んだ山谷の功績を讃えることに主題があり、関心がある。それは「読魯直蠟梅詩」という詩である以上、当然のこととも思われようが、山谷の功績を離れたところで蠟梅そのものを新たに詠んでいる例は、本邦の禅林詩には容易に見出しがたい。その一方で、「賛山谷先生」と題した次のような詩が、室町初期の建仁寺僧惟忠通恕の『雲壑猿吟』に既に見えている。

蠟梅春色入詩篇、桂子天香了祖禅、可惜賢才常被忌、

涪江秃鬢雪蕭然 (『五山文学全集 第三卷』)

いわば蠟梅のことは、山谷にまつわる故事として禅林で受容されていたと考えて誤りないように思われる。山谷の詩からひとたび離れた時、彼らの周囲に蠟を燃るが如き花や、麝香のごとき薫香は、はたして存在していたのかどうか。

しばしば逸脱を楽しむように饒舌をふるい、あの大部な抄をなした惟高でさえ、蠟梅については実に素っ気なくやり過ごしていることも、思いあわせてみる必要があるだろう。

実は『梅花無尺葳』の場合にも、疑えば疑えなくもない。万里集九がこの詩を吟じている時期とやや合わないという不審はあるものの、「臘」字にこだわるならば、「臘梅」とはやはり「臘月の梅」の意と取るべきであろう。とすれば、やがて来るべき臘月には、梅の馥郁たる香りが雪に閉ざされることなく漂い出すはずだ、との意となろう。また仮に「臘」が「臘」の誤りであるにしても、疑うべき点がある。万里は江戸からの帰路、越後国に入る前に、叔悦禅憚に対してまさしく山谷の詩を講じていたのである。⁽⁹⁾そしてこの講義が、旅の直後に抄物『帳中香』として実を結ぶこととなるのである。『梅花無尺葳』中の「臘梅」が「蠟梅」でよいとしても、その「蠟梅」ははたして実景であったか否か。あるいは、山谷に引かれての措辞ではなかったか。但し、さまざまな典籍を繰って考証に努める『帳中香』の記述からも、その点についての確たる証拠は得られない。

残念ながら、蠟梅の渡来時期については未だ明証を確認し得ていないのだが、中世末の禅僧たちの著述を検しても、蠟梅そのものを見ていた気配は感じられない。してみると、江戸初期の渡来とする説は、案外、信憑性の高いもののようにも思われる。いずれにせよ、禅僧たちが詩を通じて、いち早く蠟梅の「知識」を手に入れていたことは誤りないところであるにせよ、山谷の詩業の圧倒的な影響力の下にある禅僧たちの間で、「知識」としての「蠟梅」は、恐らく容易なことで「唐梅」に転じることとはなかったと考えられる。実物の蠟梅がもたらされ、詩文の軀から解放され、「唐」渡りの珍しさを純粋に賞翫される経過を辿ることなくして、「蠟梅」は「唐梅」の称を獲得しえなかったものと思う。

* * *

ここで、再び「カラムメ」の称に戻って見直しておくなら、貝原益軒『大和本草』（宝永六年（一七〇九）成）には、「大阪にてはから梅と云⁽¹⁾」と、これを大阪での呼称としており、その説の当否は別としても、その言い回しからは、当時、「から梅」の称が必ずしも一般的ではなかったことが窺い知られよう。「今ニ至テハ皆蠟梅ト称ス」（『本草綱目啓蒙』）とされる時点より百年前に溯っても、「蠟梅（カラムメ）」の呼び方はどうも限定的なものだったよう

だ。

さて、これらを溯る室町末のものとされる『田植草紙』の歌謡にも、「からむめ」の語が見える。これについてはどうか。

さ月のそうとめは 梅はまいるまいかや

梅はすいし 齒かいし 桃はにがいものやれ

ひとつ食いたや 天神公の紅梅

梅をまいれや むめにわ声がでるもの

ひとつまいれや 天神おしむ紅梅

うゑてもたいで お前の岸の唐梅

(新日本古典文学大系)

この「からむめ」について、新日本古典文学大系では注を欠く。旧版の日本古典文学大系頭注(『中世近世歌謡集』所収、志田延義氏校注)では、『本草綱目啓蒙』由来と思われる「蠟梅」説を記した上で、これによつては解しがたいたしている。しかし、この田植歌に関して「蠟梅」説を取らなかつたのは、なにも蠟梅伝来説のみを根拠としてのことではあるまい。そもそも、「蠟梅、本非梅類」、以「其梅同時」、香又相近(范至能「梅譜」)、¹²⁾「梅の類にはあらず」(『大和本草』)、あるいは「花謝シテ稀ニ実ヲ結ブ、大サ指ノ如ク、長サ寸余、内ニ数子アリ、形雲実ニ似テ長ク褐色、甚硬シ」(『本草綱目啓蒙』)という「蠟梅」の実が、

「梅はまいるまいかや」と歌われる掲出の歌謡にそぐわなためであろう。少なくとも、今日「蠟梅」と呼びならわしている木については、その実は食用に適さない。

先に掲出した山谷の詩(イ)「風味極不_レ浅」は、確かにまぎらわしい。あるいは食用に供せられていたか、とも思わせる一句ではある。問題は「風味」という語の用法である。一韓智翹のものとされる『山谷抄』は一句前の「雖無桃李顔」から続けて、「桃ノ様ニザゞメイタ色ハナケレドモ、梅ノ類デアルホドニ、風味ガ深テ面白ソ」(二32オ)¹³⁾と記しており、これも「風味」のまままで記され、一見、「ザゞメイタ色」を持たぬ花に対して、実の方は「風味ガ深テ」とも取れそうである。が、(ロ)の詩を併せ見ても、蠟梅は花を詠ずることに本義があると見てよく、この「風味」は嗅覚(もしくは視覚をも含む)に属する語と見るべきであろう。ちなみに万里の抄「帳中香」は「先輩云」として、「蠟梅至_二其開_一則雖_レ無_二紅白之色_一其芬芳尤可_レ愛」と記しているし、岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』書き入れ注にも、「此花ハ桃李ノ様ニサ、メキハセネトモ香カ面白ソ」とされており、「風味極不_レ浅」とは、一貫して花についての評言と見るのが妥当である。(イ)に「金箔」と表現され、(ハ)に「染成宮様黄」と表される黄色の花弁は、今日、我々が「蠟梅」と呼びならわしているそれと同

じものと見て、誤りはなからう。⁽¹⁵⁾

* * *

中世の「からむめ」の例として、もう一つ見ておこう。次は、室町末の写本とされる赤木文庫藏古絵巻『浄瑠璃物語』。

御堂のまはりに百種しゆの花をぞ植へられける。植へをく

花はどれくぞ。…(中略)…きりう、すゞき、金態きんたい、

玉態たまたい、杜若かづはた、からむめ、から菊きく、から撫子なでこ、…⁽¹⁶⁾

浄瑠璃御前の邸の様を写すこの場面からも、「からむめ」の実態を推し量る情報は少ない。「御堂のまはりに」に植えおかれた花々の一つとなれば、鑑賞用のもの。それと限定はできないけれども、この場合には所謂「蠟梅」でも問題はない。但し、先にもふれたように、蠟梅そのものの伝来を江戸時代初頭とする説が、かなり信憑性の高いものであることからするなら、判断は微妙であろう。

はじめに触れなかったが、賦物語彙としての「唐梅」はどこまで溯るのかという点も、一つ興味深い問題である。

賦物集として現存するもので最も古い、野坂本『賦物集』(『歌ぶゑ』)の内容が、当然ながら注目される。しかし、同書には一部欠損があるため、「唐何」の項に「梅」があったかどうか確認できない。それでも、これに次ぎ古態をとどめるものとされ、「一条兼良以前のもの」と推測される⁽¹⁷⁾

『和歌集心鉢抄肝要』の「賦物次第」には、既に「唐梅」の語が見えている。この「賦物次第」がいつ頃の賦物の実態を伝えるものなのか、厳密には決定しがたいのだけれども、おおよそ南北朝から室町初期を想定してよいのではないかと思う。

百韻などの形で今日に残る連歌作品として最古の「唐何」は、応安六年(一三七三)のものと思われる「天神御独吟」の百韻である。その発句は、「くれなるに雪こそまじれむめのはな」というもので、「むめ」をとったとするならばこれも「唐梅」の例となるものの、「くれなるゐ」といった可能性もあり(『和歌集心鉢抄肝要』等)、俄には断じがたい。しかも同百韻には、諸本により賦物を「何木」とするものも多く、本来の賦物がいずれであったかも定かでない。これに次ぐものとしては、応永二十年(一四一三)二月十一日に張行された『看聞日記』紙背連歌まで下る。この百韻懐紙は、原懐紙であったと考えてよからう。ならば「唐何」の賦物であったことは確実である。そして、この時の発句が「香をゆづれ梅にあひあふ初桜」(『圖書叢叢刊 看聞日記紙背文書・別記』)。「梅」をとって「唐梅」としたものと考えてよい例である。現在、管見の及ぶ範囲では、これを溯る例を見出すことは難しいが、「唐梅」の語が相当に古くからあったものであろうことは十分推測され

る。

となれば、賦物語彙「唐梅」を除くならば、孤立的に古い文献における用例ではあるものの、次の『塵袋』巻二の記述は注目されなければならない。

一楊梅、カキテハ、カラムメトヨムベシ、ヤマモ、ト云、心如何、凡、不慮、ヨミナリ、昔ヨリ云ナラハセルバカリナリ、但七卷ノ食経、中ニヤマモ、山桜桃ト云ヘリ、コレニツキテ、ハジメヲハリノ字、トリアハセテ、ヤマモ、ト云、ナルベシ

(日本古典全集)

鎌倉末年頃の成立とされるこの辞書の書物には、「楊梅」をもって「カラムメ」の称をあてるべきことが説かれているのである。楊梅が「カラムメ」の名をもって呼ばれるべきだとの考えの基には、おそらく「ヤマモ、如何、楊梅トカケリ、楊州ノモ、歟、楊州ノムメ歟」(『名語記』巻九)との認識があったものと思われる。時代的な近きからしても、『塵袋』の所説は賦物語彙「唐梅」の正体を知る上で、第一に抛るべきものと言つてよいと思われる。

『塵袋』では「不慮ノヨミ」とされてはいるものの、「楊梅」には古くより「ヤマモ」の称をあてるのが一般的であった。『和名類聚抄』に「夜末毛々」とするのをはじめ、『節用集』類に至るまで、このよみは一貫している。これを「カラムメトヨムベシ」とする『塵袋』の説は、む

しろ例外的なものと言つてよい。しかし、「昔ヨリ云ナラハセル」この呼び方に「カラムメ」のよみを対置する以上、当時、「カラムメ」と称される別の対象があつてはならないはずである。

そこで、次には「楊梅」の実態が問題となつてこよう。

この点については、『和名抄』に箋注を付した狩谷棧斎が細かに考証しているように、「山桜桃」との混乱なども問われるところであるけれども、いま細かな問題には立ち入らないでおこう。ともあれ、植物の古称と現在の称との同定作業は、文献上の操作だけでは定かにしがたい点が多いことを改めて認識しておく必要があるということだ。文献上の操作ということなら、例えば『塵袋』の記す「七卷ノ食経」云々の記述も、『和名抄』あたりに由来する可能性が高く、更には『和名抄』が抛り所にしたと思しい『本草和名』まで溯っていく。即ち、これらの記述からして既に、文献的な知識のフィルターを通したものである点は確認しておかねばならない。無論、一部にそのような保留をつけただ上ならば、「状如苺子赤色、味酸甜可食之」と記される『和名抄』の「楊梅」から、「Hua fruita do mato como madronhos.」(『日葡辞書』Yōbai)、「Certa fruita do mato como medronhos.」(同Yanamomo.)と¹⁹ される室町末の「楊梅」に至るまで、今日の「やまもも」と一

つながりのものと考えて大過ないであろう。

中世に広く行われた往来物の一つ、『庭訓往来』の三月返状には、庭に植える樹木を列挙する段で、

次樹木事、梅、桃、李、楊梅、枇杷、杏、栗、柿、梨子、椎、榛子、柘榴、棗、樹淡、柚柑、柑子、橘、雲州橘、柚以下、心之所_二及、令_二尋植_一候華。

さまざまな樹木に交じり楊梅の名を見出す。一見して明らかのように、前後「すべて果実・堅果の類」であることに注目しなければならぬ。そしてこれと同様の列挙は、

：已上所_二尋出_一物者、：（中略）：金柑・柑子・温州橘・有杷・林檎・楊梅・柘榴・桃・杏梅・李・梨子・銀桃：（『異制庭訓往来』）₂

菓子者、青梅、黄梅、楊梅、枇杷、瓜、茄、覆盆子、岩棠子、桃、杏、李、棗、林檎、石榴、梨、奈、柿、棹、栗、椎、金柑、蜜柑、：（中略）：雲州橘等。

（『尺素往来』）
というように、『異制庭訓往来』から、下つては『尺素往来』にいたるまで共通しており、「菓子」（『尺素往来』）、果樹として認識されていたことを示している。だが、庭木の列挙という類似した形をとってはいても、『浄瑠璃物語』との違いは重要で、この『物語』中の「からむめ」の文脈に「楊梅」を代入することには、違和感を拭いきれない。

『庭訓往来』も記しているように、楊梅が庭木として不適ということではない。ただ、『物語』の文脈にはむしろ、花をもって賞翫され、且つ灌木としてその前後の草木とも釣り合う「蠟梅」の方が、よりふさわしくはあろうと思われるからだ。先にもふれたように、この判断は『物語』の成立時期の認定と係わることもあり、結論は保留としておかなければならないのだが。

* * *

恐らくは、「からむめ」の理解にどこかの時点で振れが生じたものと思われる。もはや、厳密にその転換のさまざまなとどりようもないが、山谷詩など宋、元代の詩材として興味をもたれた「蠟梅」は、やがて我邦にもたらされ、「唐」渡りの「梅（のごとき花）」として珍重されたことであろう。そして、やがては「からむめ」の称に、よりふさわしいものとして、楊梅の称を奪う形になったのであると思う。古辞書類の流れを追っても、楊梅は常に「ヤマモモ」と記されており、「カラムメ」の名は結局、定着せずに終わったようだ。『塵袋』の力説むなしく、「カラムメ」の称はかなり早い時点ですたれていたのかもしれない。そして、蠟梅に充てられた「カラムメ」の名も、どうやら長続きはしなかったらしい。それに対し、賦物語彙としての「唐梅」は室町時代を通じて、確かに生き続けてはいた。

けれども、連歌の一座の中で、その語に具体的な実態が結び付いた理解がなされて使われていたのかについては、疑わしいとしなければならぬ。

してみると『田植草紙』歌謡の「唐梅」が蠟梅でないとして、ではこれに楊梅を充ててよいものか、判断に苦しむ。歌謡における最終句へのつながりも、わたくしには必ずしも明瞭でない。けれども、「天神惜しむ紅梅」に続く一句の中の「唐梅」には、あるいはその内実よりも文飾の上で「唐」であることが重要だったのではないだろうか、という気がしないでもない。すなわち、そこには渡唐天神のイメージが影響を及ぼしてはいなかっただろうか——そんな可能性も捨て切れないでいる。²²⁾

注

- (1) 京都大学国語国文資料叢書『百韻連歌懐紙 曼殊院蔵』所収。
- (2) 山内洋一郎氏「連歌賦物の語彙」(同氏『連歌語彙の研究』(95年、和泉書院刊))
- (3) 平凡社東洋文庫による。
- (4) 「地錦抄附録」は、『花壇地錦抄』『増補地錦抄』『広

益地錦抄』を承ける形で、享保十八年に四巻四冊で刊行されたといわれる(平凡社東洋文庫288『花壇地錦抄・草花絵前集』解説・あとがき(加藤要氏)参照)が、原本未見。

(5) 内閣文庫蔵朝鮮覆元刊本

(6) 『五山文学新集』第六巻による。但し、市木武雄氏『梅花無盡蔵注釈』を参照し、脱落と思われる文字を「」で補った。

(7) 『大日本佛教全書第八九巻 藝文部二』

(8) 『山谷詩集注』の引用は、西尾市立図書館岩瀬文庫蔵の五山版による。なお、「王立之詩話」とは、王直方の「詩話」で、立之は字。『茗溪漁隱叢話前集』所引の本文より示すと、「蠟梅、山谷初見之、作二絶、一云…、一云…」として前掲(イ)(ロ)二つの詩を挙げ、「縁此蠟梅盛於京師」(第四十九「山谷下」、76年 中華書局刊廖德明校点本による)とある。『漁隱叢話』当該箇所は、これに続く「茗溪漁隱云、東坡亦有蠟梅詩云、…」との記事ともども、あとに触れる『帳中香』も引載するところである。

(9) 「類女功撚蠟所成」(『山谷詩集注』)。

(10) 中川徳之助氏『万里集九』(平9、吉川弘文館刊人物叢書215)は、この講義について、「完了したのは

長享二年（一四八八）の四月から七月にかけての間のことであろう」と推測しておられる。

(11) 『益軒全集 第六卷』

(12) 『帳中香』所引。范至能（成大）は宋代の人。また「梅譜」は『全芳備祖』にも引載される。

(13) 建仁寺兩足院藏『山谷抄』（『続抄物資料集成 第六卷 山谷抄』）による。

(14) 例えば『山谷詩集』巻十七には「跋^{ハツメ}子瞻^{カハルニ}和^ニ陶詩^{カヲ}」として、「彭沢^ハ千戴^ハ人、東坡^ハ百世^ハ士、出処^{トモト}雖^ハ不^レ同、風味乃相似」との表現が見える（この詩『冷斎夜話』にも）。いわば対象のもつ「雰囲気」のごとき意味とすべきものである。

(15) しかし、ここでも呼び名と実態の間には厄介な問題がある。黄色の花弁の梅という珍しさから、蠟梅には「黄梅」との別名がある。我邦では『書言字考節用集』、『和漢三才図会』などが、蠟梅の一名としてこの名を掲げるのだが、これとは別に、これも「花のかたち梅に似たり」（『大和本草』）という様子から、「黄梅」と名付けられた植物があった。迎春花とも称される。『日本国語大辞典』は後掲『尺素往来』の「黄梅」をも、これと一種のものと扱っている（「おうばい」の項）が、『尺素往来』では「菓子」としてこれを挙げ

るように、「不^レ結^ス実」（『和漢三才図会』）と記される

「黄梅」とは別物と考えるべきである。ここは『日本国語大辞典』「こうばい（黄梅）」の項が記すように、

黄色く熟した梅の実、直前の「青梅」との連続から、「アオウメ」に対する「キウメ」と解してよいのではないか。『湯山聯句』寒韻中には「黄梅鶯啄落」の一句があり、『湯山聯句鈔』によれば、「五月ノ時分ノ黄ナル梅ヲ、鶯ガ啄ミ落タゾ」（新日本古典文学大系）とあるように、これもやはり梅の実なのである。

(16) 引用は『室町時代物語大成』による。また、これも赤木文庫蔵室町末写本『浄瑠璃御前物語』では、列挙される植物名に多少の出入りはあるが、やはり「からむめ」は入っている。なお、適宜、私に漢字を当て濁点を付したため、ルビによりものと表記を残した。「きりう、すゝき」は「切斑の簿」であろうか。ここでの樹木の列挙には、『尺素往来』に「為^ニ庭上之景^ト前裁^ト（栽^ト）莊嚴仕候」として掲げられている四季の樹木が参考となろう。「金態」「玉態」の漢字もこれによる。

(17) 堀部正二氏「和歌集心躰抄抽肝要」と二條良基の連歌學書（『和歌集心躰抄抽肝要』へ昭44、大学堂書店刊）所収

(18) 『連歌総目録』（平9、明治書院刊）による。

(19) パジェス『日仏辞書』では、「madronhos」あるいは「medronhos」該当部分を、「arbouses」で充てる。

今日、一般の辞書ではこれを「西洋やまもも」と訳す。

(20) 石川松太郎氏校注『庭訓往来』(73年、平凡社刊東洋文庫242)

(21) 『異制庭訓往来』『尺素往来』の引用は、それぞれ『日本教科書大系 往来編 古往来(四)』、『同 古往来(二)』による。

(22) 希世靈彦の『村庵藁』巻中に、「北野入唐画像」と題して、「日本之東北野神、化身遊戯大唐春、折梅携手便帰法、寄与無窮求福人」(『五山文学新集 第二巻』。傍線部の一字、底本では「乃」の部分を「手」に作る)が、校訂者の注記に倣い、「携」の字と考えた)との詩が収められている。これによれば、渡唐天神画像に見られる天神の携えた梅花は、唐から持ち帰ったことになる。渡唐天神伝承についての研究は幾つかあるが、ここでは伝承の広がりについてふれた、小林幸夫氏「渡唐天神の秀句——禅林の夢想天神説話——」(『伝承文学研究』第四十五号 平8・4、のち同氏『咄・雑談の伝承世界——近世説話の成立——』平8、三弥井書店刊)所収)を挙げておく。

〔付記〕小稿をなすにあたり、馬場良二氏、山田俊氏から貴重な御教示を得た。記して御礼申し上げます。無論、失考、誤認などがあれば稿者の責任である。